

山川訳ダンテの生みの親ー忘れられたダンテ学者大賀壽吉についてー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤井, 規晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/134

山川訳ダンテの生みの親

—忘れられたダンテ学者大賀壽吉について—

赤井規晃

1. はじめに—大賀壽吉と山川丙三郎

山川丙三郎が東北学院の生んだ傑出したダンテ学者であることに異論はない。しかし、『神曲』、『新生』の翻訳が成立するにあたって、一介の「町人学者」¹ 大賀壽吉という人物の強力な後ろ盾を必要としたことを無視する訳にはいかない。

大賀は大阪の薬種商武田長兵衛商店（現在の武田薬品工業）の店員をしながら、ダンテの研究に勤しんだ。収集した文献は2,600点を超え、個人のコレクションとしては東洋随一と評されるほどの質と量を誇った。これらの図書は没後「旭江文庫」として京都大学に寄贈され、それにより大賀は歴史に名を残すことになった。

山川と大賀、二人の関係を雄弁に物語る資料が残されている。山川が『神曲』および『新生』の翻訳に取り組んでいた時期（大正4年から昭和4年）を中心に交わされた往復書簡である。大賀から山川に宛てた書簡はその数210通にのぼり、およそ半数が山川の没後蔵書の整理にあたった木村文雄の手により翻刻され『イタリア学会誌』に発表された²。

大賀は山川の質問に答えて、事細かく欧米の研究書の記述を調べては書き送り、筆の滞りがちな山川を励まし続けた。また、海外のダンテ学の最新動向を知らせ、高価なダンテ研究書を輸入して、無償で提供したりもした。文

¹ 大賀に「町人学者」の称号を冠したのは会津八一や浜田耕作の友人であった大阪毎日新聞社記者（のちNHK大阪放送局放送部長）伊達俊光である。伊達は、大正後期から昭和初期のいわゆる「大大阪」時代に、幅広い人脈を活かして、京阪神の芸術家、学者、実業家に横断的なネットワークを組織し、商都大阪の文化的地位を向上させようと多様な活動を繰り広げた人物である。

² この書簡の原本は行方不明となっている。木村は東北学院大学図書館に寄贈した旨、書き遺しているが、東北学院大学図書館には所蔵されていない（下館2013:21）。

字通り物心両面で山川の訳業を影ながら支え続けた大賀の熱意は尋常ではなく、一時はパトロンを見つけて来て、山川に大阪へ移住して、翻訳に専念しないかと持ちかけるほどの熱中ぶりであった。書簡からは大賀の深い情熱が伝わってくる。

山川研究における大賀の重要性は竹井（1988：59-61）、下館（1991：296-303）がすでに指摘している。無論、山川の翻訳者としての姿勢を知る上で往復書簡が最も重要な情報源であるのはいうまでもない。しかし、山川が大賀との交流を通してダンテ理解を深めていったことを考えると、大賀がどのような人物で、ダンテをどう理解していたかをまずは明らかにしなければならないであろう。

これまで大賀に対しては「旭江文庫」の旧蔵者としてしか目を向けられてこなかった。たとえば、村橋（1974：8）は、大賀の人物像について「敬虔なクリスチャン（プロテスタント）で非常に英語の堪能」な人物で、「武田製薬株式会社（大阪）に勤務」し「その当時の京都大学文学部教官（新村出、厨川白村、浜田耕作、黒田正利等）と親交厚」かった、と記すに止まっている。しかも大賀の生年を誤記しているところを見ると、基本的な伝記情報の収集もままならなかったようである。

実際、大賀の生涯の全体像を捉えようにも、情報は限られている。管見の及ぶ限り、大賀の伝記に関し信頼に足る情報源には、『信仰三十年基督者列伝』（以下「列伝」）の記事および「故大賀壽吉氏略歴」（以下「略歴」）の2つしか見当たらない。

前者が人物事典の体をなすもので600字程度の簡潔な記述であるのに対し、黒田正利（1890-1973）の執筆になる後者は、「履歴と共に大賀氏がダンテ研究を通じて日伊文化の爲め貢献せられたる史實の略傳とも見らるゝもの」（「略歴」への前書きより）との言葉どおり、大賀の生涯における重要事項を網羅し、ダンテ学者に至る道を見事に描きだしている。惜しまれるのは、記述に曖昧な部分や遺漏が見受けられる点である。

本稿の目的は、この「略歴」の記述に対し、特に前半生について他の資料による検証を行い、逸事を加え、伝記資料を補うことにある。

2. 岡山と京都—英語とキリスト教との出会い

大賀壽吉は、慶応元年9月4日、岡山城下門田屋敷に生まれた。「略歴」によると、大賀家は代々池田侯に仕えてきた家臣の家系であるとされているが、家族構成や経済状況について「列伝」「略歴」ともに触れるところはないため、これ以上のことは分からない。大賀が幼少期に受けた教育に関して、「略歴」は次のように述べている。

藩には早くより學校が設けられ藩の子弟を養成したのであります。で大賀氏は六才のとき拔擢されてこれに入り早くも頭角を表はしたのであります、當時の學校は時勢の影響の下に實に目まぐるしい組織と内容上の變化を受けてあるのであります、此の時既に英語を學び西洋の化學や電氣學についての術語がこの俊敏な少年の耳朶を撃ち新文明の獲得と創造とに突き進めてゐたのであります。(黒田1937:3)

ここで重要なのは、大賀が英語および英学に極めて早い成長段階から親しみ得る環境に育ったということである。「略歴」にある「学校」が藩校のことを指しているならば、それが辿った数奇な運命を考慮に入れると、大賀は、普通学校（明治5年1月創立）および私立遺芳館（明治6年12月創立）に付設されていた尋常小学を経て岡山中学校（明治12年創立）で学んだと考えられる³。もっとも、明治初期の岡山県の学事改革は非常に複雑な過程を経ているため、これはあくまで一つの可能性に過ぎず、資料に基いた緻密な検証が必要である。

「列伝」によれば、「極めて進歩的」な思想の持ち主であった父忠智の手引

³ 岡山の学時改革と藩校の変遷については、岡山県（1942）、岡山市（1993）および後神（2005）を参照されたい。

きで、大賀は12、13才の頃、キリスト教に導かれたという。後年、「老の繰言」という小文で、大賀自身が「生が初て基督教を聞きしは十二三才の頃なりし」（大賀1912）と記しているので、その時期に間違いはないようである。先取の気概に富む父は、わが子の将来を見通し、新しい時代の息吹に触れさせたいと願ったのであろう。

大賀がキリスト教に目覚めた頃、すなわち明治10、11年というのは、岡山でキリスト教の伝道が活発化しはじめた時期にあたる。そもそも明治以降岡山にキリスト教を持ち込んだのは、県の学務・衛生主任をしていた中川横太郎（1836-1903）という人物で、神戸の宣教医テイラー（Taylor Wallace, 1835-1923）に協力したことがきっかけであった。明治10年に中川が神戸にいた宣教師ベリー（Berry John C., 1847-1936）に本格的な伝道を要請すると、アメリカン・ボードは岡山にミッション・ステーションを設置することを決め、明治11年に3名の宣教師を派遣した。中川は、来岡する宣教師や同志社の生徒の支援者となって、六番町の自宅を開放し、キリスト教の集会を行うなどして、積極的に伝道活動に協力した。

横太郎自身は入信しなかったものの、妻（雪）、長男（堅一）をはじめ親族（雪の母大西秀、妹の木全嘉代と大西絹）は感化を受けて次々と入信した。その結果、中川、大西、木全の三家は、たちまち門田界限を中心に成立したクリスチャン・コミュニティのリーダー的存在となった。大賀が生まれ育ったのは、そうした岡山におけるキリスト教伝道の中心地であった（松村1955；平山1989；濱田2012）。

明治13年10月13日、大賀は岡山教会の創立にあたり、中川、大西、木全家の者とともに新島襄から洗礼を受け、信者となった。この時洗礼は受けなかったが、木全家には大賀より一歳年上の男子がいた。後に同志社で大賀と同級になる木全祝（1864-1900、のち大西と改姓）である。少年は、叔父の中川横太郎が総括を務めていた私塾明智義塾（のち又新小学校）を経て、明治10年1月に同志社英学校普通科に進学していた。大西家や木全家の者と

交流があった大賀が同志社に進学を決意したのは、一歳違いで京都の英学校に通う、この祝を意識してのことであったとみて間違いはなかろう。ところが、なぜか「列伝」でも「略歴」でも、大西と大賀の関係については一言も触れられていない。

明治14年の秋、大賀は岡山を離れ、京都の同志社英学校余科に入学した。余科は神学教育を行う課程で、普通科を卒業した生徒が進学する、今日でいう大学院に相当する。*Doshisha Faculty Records*（同志社教授会議事録）の明治14年9月19日の項には大賀の入学に関して、“Agreed to admit Mr. Oga to the theological class if he shows by examination sufficient knowledge of English to go on to advantage.”（松井、児玉2004：29）という記述がみられる。このような入学条件が課されたのは、当時の同志社では、教場において教師も生徒も英語を用いており、課業についていくには高い英語力が必要であったためである。大賀はこの条件をクリアする高い能力を示し、入学が認められた。

大賀の同志社入学時期は、大西祝が故郷の父から受け取った書簡の記述からほぼ特定することができる。すなわち、明治14年10月25日付の書簡にある、「梶川、三宅、大賀其他ノ諸君モ貴様同様勉学可有之ト察居申候」（石関、紅野1993：270）という記述から、この時までに試験が実施され入学が決定していたと考えられ、翌月28日付の書簡に「御序ノ節該校聖徒大賀、三宅、其他諸君へ宜御伝可被下候也」（石関、紅野1993：273）と記されていることから、遅くとも11月末までに大賀は京都に移動していたと考えられる。

同志社で大賀がどのような学生生活を過ごしたのか、その後の人物形成を探る上で非常に興味深いところではあるが、その様子をうかがい知ることのできる資料は全くといっていいほど無い。

たとえば、同志社初期の在学生の回想集『創設期の同志社－卒業生たちの回想録－』（同志社社史資料室、1986）や、大賀と同時期に普通科に在籍していた安部磯雄（1865-1949）の自伝『社会主義者となるまで』（改造社、1932）には、明治10年代後半の同志社の様子が、さまざまなエピソードを

通じて語られているものの、そこに大賀の名が登場することはない。

『同志社百年史』には、在学中の大賀に言及がある資料が辛うじて2点だけ収録されている。それは、彼が明治16年に寮長に選出されたという記事と（同志社1979：768）、同級生3名と連名で校長新島襄に提出した『神学科目ニ付願書』という資料である（同志社1979：286-288）。しかし、この二つの資料からは、さしあたって重要な情報を得ることはできない。

この年の余科入学者は22名、その内13名が明治17年6月に余科第2期生として卒業した（同志社1979：701）。原田助（1863-1940）、堀貞一（1863-1943）、奥亀太郎（1868頃-1924）、杉田潮（1856-1925）、綱島佳吉（1860-1936）、上原方立（1860-1884）ら伝道師の道を歩んだ者や、優れた学者となった大西祝や村上直次郎（1868-1966）といった面々が大賀の同級生である（同志社1979：617-618）。大賀は彼らとは対照的に、「所定の課程を了らないで」退校し、伝道師でも学者でもない、平信徒すなわち「レイマン」（layman）の道を選択した。

退校理由の解明は重大な課題ではあるが、真相を明らかにするには未だ資料不足である。ここでは、大賀の退校に関係した二、三の事実を指摘するに止めておく。

明治16年8月頃に原田助が帰省中の大西祝に送った書簡に次のような条がある。

一昨日大賀ヨリ来信、帰校シ得ザル理由（資金不足）等、縷々申来レリ。弟モ殆ンド之レガ答ヘニ苦シム。兄其実際ニ就キ金森君等トモ相談ノ上、成ルベク九月ニ連レテ来ラズヤ、生ヨリモ一応勸励ノ書ヲ出スベシ。又兄ノ見込ミアラバ拝聴シタシ。何日頃帰京ノ管ナリヤ（石関、紅野1993：497）

夏休みを故郷岡山で過ごしていた大賀が、退校を決心し、原田にそのことを知らせてきた。しかし、原田はその理由に納得がいかなかったようで、大

西や岡山教会の牧師金森通倫（1857-1945）の手も借りて、大賀の退校を止められないかと考えた。大西に対して、9月には京都に連れて帰って来るように、とまで言っている。

その書簡から一か月ばかり経った明治16年9月20日の *Doshisha Faculty Records* には興味深い記録が認められる。“Agreed to allow Mr. Oga to postpone his examination in Theology one week.” すなわち大賀の試験を一週間猶予する、というのである（松井、児玉2004：55）。唐突で不可解な内容であるが、先原田の書簡を踏まえれば、この決定は、原田が退校を阻止しようと奔走した結果ではないかと推測される。

このように、退校に絡んでちょっとした騒ぎを巻き起こしたものの、大賀は翻意することもなく、学校を去っていった。そこには大賀の強い意志を感じ取ることができる。少なくとも、大賀にとっては自主的に退校する内的必然性があったということだけは言えよう。

その後、大賀の足取りはしばらく途絶えてしまう。「略歴」によると、退校後の大賀はいったん三田に移り、そこからさらに神戸に移ったとされる。次に資料的に大賀の存在を確認できるのは、明治20年6月の神戸であるから、明治16年9月以降、実に4年近い期間を三田に過ごしていたことになる。しかし、大賀が三田で何をしていたのかを知る手がかりは今のところどこにも無い。

3. 神戸ー「レイマン」として

神戸における大賀の足取りを証する最も古い記録は、明治20年6月24日付『神戸又新日報』に掲載された神戸基督教青年会主催の演説会の広告である。大賀はその演説会で弁士をつとめている。その頃大賀は「神戸英語学会」（青年会が中心となって始めた私設の英語塾）の英語教師を務めたり（『神戸又新日報』明治20年7月8日付）、濃尾地震の際には救援活動に参加し（『基督教新聞』明治24年11月20日付）、義捐金募集を兼ねたチャリティ

イベント「震災救助幻灯會」を企画するなど（『神戸又新日報』明治24年11月12日付）、教会の社会事業に積極的に関与していた（山口、田中1984；神戸YMCA 1980：66-67、74-75）。

また、頌栄幼稚園の設立者にして、日本にフレーベルの幼児教育思想を導入したアメリカン・ボードの宣教師ハウ女史（Howe Annie Lyon, 1852-1943）の重要な協力者にもなっていた。「そのあと十二時まで日本語の教育雑誌からの記事に耳を傾けました。大賀氏が私のために訳してくださいました」（ハウ1993：59-60）という手紙の一節や、彼女が選者となった『幼稚園唱歌』（明治25年）や『クリスマス唱歌』（明治27年）の冒頭の謝辞などから、大賀が日本語の不自由なハウの助手となって、保母養成、幼稚園教育の事業を支えていたことがわかる⁴。

こうした活動について「列伝」も「略歴」も一切言及していないが、社会事業に熱心に取り組んでいたという事実は大賀の生涯を理解する上で無視する訳にはいかない。

「略歴」で言及されている職歴については、前後関係や年代が曖昧なので、以下に様々な資料を援用しながら整理してみたい。

出発点となるのは、同志社が所有する「新島遺品庫」に収められた明治25年11月30日付の原田助あての書簡である（目録番号1918）⁵。この書簡は山川宛のものと違い、生活者大賀の声を伝える資料としても貴重な資料である。この書簡から、われわれはまず、大賀が新聞社に勤めていた時期を推定することができる。

⁴ 『続幼稚園唱歌』（明治29年）の編集は大賀が担当している。ちなみに同書の奥付によると当時の大賀の住所は「神戸市下山手通八丁目百五十八番屋敷」。

⁵ この書簡は「新島襄全集」（京都、同朋舎出版、1983-1996）に未収録であるが、「新島遺品庫一般公開システム」によりウェブ上で公開されている（<http://joseph.doshisha.ac.jp/ihinko/>、閲覧日：2013年12月20日）。この資料の成立年代が、明治22年11月30日となっているのは明らかに誤りであり、正確な日付は明治25年11月30日でなければならない。なぜなら、この手紙は神戸教会を離れた原田にあてられたもので、間もなく原田夫人が出産する、ということが書かれているからである。事実関係を整理すると、原田は明治21年7月に米国へ留学、明治24年11月8日に帰国、12月26日に佐喜子と結婚式を挙げると、直ちに上京、明治28年まで番町教会の牧師を務めた。間もなく生まれる子とは、すなわち長男健（明治25年12月6日生まれ）のことである。

小弟も当月限りにて兵庫ニウス社を退くことに相成申候 … (中略) …然し小弟ハ二ケ年も満足に相つとめ居る故本月中はつとめ居てよろしくもし直に退社致候へば本月の給料を給するとの事に御座候 かかる次第にて他に業を求むる事と相成候へ共目下さし当たりては相当の口も無之困却致居候 さりとてあまり下杯のことも出来不申如何いたさんかと思案中に御座候 目下はいづれにも人へらしにて人多く地位少なき故容易には得られまじきかと心配致居候 もし相当の御心当たりも有之候ハ、何卒御世話被成下度御依頼申上候

ここで大賀は「兵庫ニウス」(*The Hiogo News*、慶応4年4月創刊)ですでに「二ケ年」働いていると述べている。ということは、入社時期は遡って明治23年秋頃と推測される。それは大賀が摂津三田の永井喜一の娘かと結婚した時期(9月)にほぼ重なっている。一方「略歴」の方を見ると、大賀が動めていたのは「兵庫ニウス」ではなく「ヘラルド」(*The Kobe Herald*、明治21年4月創刊)⁶となっており、書簡の記述内容と異同がみられる。しかし、最初「ヘラルド」に入社し、結婚を機に「兵庫ニウス」に転職したと考えれば、いずれの記述も矛盾なく統合することができる。この仮説通りなら、早ければヘラルドの創刊時期の明治21年4月頃から新聞社勤務をしていたとみることも可能になる。

書簡の書かれた明治25年頃の神戸では3紙(*The Hiogo News*、*The Kobe Herald*、*The Kobe Chronicle*)の英字新聞がライバル関係にあり部数を競っていた。「兵庫ニウス」は、後発の2社に負け、徐々に部数を減らし、経営難に陥っていた。引用した書簡においても会社の苦しい状況が述べられている。最終的に、人員削減止む無しと判断した社の方針に従い、大賀は退職することを余儀なくされた。

明治25年末までには新聞社を退社したとみられる大賀は、次いで高等小学校の英語教師に職を得た。「略歴」の伝えるところでは、「高等小學校に英

⁶ 創刊年代に諸説あるが、ここでは北根に従う(vii-viii)。

語科が置かれたとき⁷兵庫に英語教師を奉じてみられた氏に對し、神戸市の當局は辭を低うし、最も高い俸給を出して氏を聘した」とのことである。まだ幼い子供（長男栄滋、明治24年生まれ）を抱えた大賀は露頭に迷う訳にいかなかったので、市の申し出は大層有り難かったに違いない。もっとも、大賀が訓導の資格を有している筈はないので、その雇用は新制度発足時の特例として臨時的なものであった可能性が高いが、いずれにせよ、英語のお蔭で身を救うことができたのは幸いであった。

その後、大賀は、小学校教師を2年程つとめ、住友銀行に転職し、さらに武田長兵衛商店に迎えられるというキャリアを歩む。その間の経緯は、5代目武田長兵衛（1869-1959）とその周辺の人物による回想などをもとにまとめると、概ね以下ようになる。

明治10年代に燐寸および石鹼の製造・輸出を行う鳴行社を興し、大成功をおさめた播磨幸七という人物がいた（赤松1980：14-17）⁸。彼は神戸教会に属するクリスチャンで、晩年は頌栄保育学院の理事長をつとめ、組合教会にも強い影響力を持っていた神戸財界の名士の一人であった。詳細は不明であるが、大賀はこの播磨の店に入り、外国商社との取引事務の手伝いをするようになった。おそらく、学校教師の薄給では生活が大変だったため、教会での繋がりを利用して家計を支えようとしたものと推察される。

播磨の店では、石鹼製造の関係で外国産の香料も取扱っていた。そこへ明治26年に芳香原料専門の小川商店を設立した小川安兵衛（1860-1911）という武田長兵衛商店の番頭が商売の関係で出入りするようになり、播磨に来ていた大賀と知り合った。ちょうどその頃武田長兵衛商店では洋薬の直輸入を考えたばかりだったので、大賀の人物に惚れ込んだ小川は、早速5代目

⁷ 明治23年10月7日公布の小学校令（明治23年勅令第215号）を受け、関連法規の整備が整った明治25年10月。

⁸ 明治22年の『神戸市公民名簿』によると、個人納税額では上位20位に入るほどの成功者であった（沖須1889）。かれの下では、一時、ライオンの創業者小林富次郎（1852-1910）や今井館聖書講堂の寄付者今井樟太郎（1869-1906）といった著名人も働いていたことがある。ちなみに小林がクリスチャンになるきっかけを作ったのはこの播磨である（加藤1911：42-48）。

長兵衛に彼を紹介し、週に2回程度顔を出して外国との通信の事務をやってもらうよう手配した。5代目長兵衛自身の記憶では、それが明治27年の秋頃のことであったという（小川1995：3-7；武田1960：15, 154-155）。

次に大賀は小学校教師から銀行員に転身するが、住友銀行神戸支店の創業が明治28年1月なので、入社時期は少なくともそれ以降のことになる。住友で働くようになってからも、経済的な理由からであろうが、播磨や武田の手伝いは続けていた模様である。

大賀の貢献で武田の欧米での取引網は順調に拡大していった。店主の厚い信頼を勝ち取った大賀は明治33年に正式に武田長兵衛商店の店員として迎えられ、経済的に安定した生活を獲得する。また、このことによって外国商社との取引のコミッション名目で高価な図書の輸入が自由にできるようになり、後のダンテ図書収集事業に計り知れない利益をもたらすことにもなった（武田1960：171）。

以上が、諸資料から再構成される明治20年代後半の大賀の経歴である。

4. 大阪—ダンテ研究者として

武田の店員となった大賀は大阪に住まいを構えた（浪花教会への転会は明治36年3月8日）⁹。以後、大賀は輸入取引の責任者として、昭和2年に退職するまで武田の発展を支え続けた。

教会との関係においては、組合教会の要職を歴任し¹⁰、昭和5年には、英国ボーンマス（Bournemouth）で開催された第5回会衆派教会世界大会（The 5th International Congregational Council）に日本代表として網島佳吉とともに参加するなど、大きな貢献をした。

かたわら、ライフワークのダンテ研究に全力を傾け、数多くの文章を書き、

⁹ 住所は大阪市東区島町1丁目8番地。天下茶屋（大阪市住吉区天王寺町坂之口通1475、のち同区相生通3丁目）への転宅は大正5年12月頃。

¹⁰ 幹事（大正3年～大正4年）、理事（大正5年～大正9年）、総務部幹事（大正10年～大正11年）、『基督教世界』編集委員（大正4年～大正14年）など。

講演を行った。そのピークはダンテ生誕650年(大正4年)と没後600年(大正10年)という二つの記念すべき年にまたがっている。

大賀とダンテの出会い、武田の店に入ったのとはほぼ同じ頃であった。伊達(1942:277)によれば、そのきっかけは上田敏(1874-1916)の『詩聖ダンテ』(金港堂、明治34年)であったという。時に大賀36歳、それはまさに「人生の羈旅半にあたりてとある暗き林のなかにありき」(ダンテ1914:1)時であったということに、運命的な符号を感じざるを得ない。

大賀のダンテ研究の中核は、新聞・雑誌に寄稿した36編のダンテ論である。当初の発表媒体は『新人』や『開拓者』、『基督教世界』などキリスト教系のメディアが中心であったが、上田敏の知遇を得て¹¹京都帝国大学文学部の教官との交流が始まると、京都文学会の『藝文』や『MUSE』といった学術雑誌にも寄稿しはじめた。

著述活動と並行して、大正4年5月には上田敏とともに「ダンテ誕生650年記念会」(京都大学青年会館)¹²を開催したほか、東京、京都、大阪でダンテに関する講演を度々行い、ダンテ学の普及に尽力した。また、大正8年には、新村出(1876-1967)、浜田耕作(1881-1938)らと共に京都帝国大学文学部内の「伊太利亜會」の立ち上げにも参画している¹³。

大賀とアカデミズムとの交流は京都帝国大学の教官だけでなく、早稲田大学の坪内逍遙(1859-1935)や横山有策(1882-1929)、若手英文学者の竹友帛雄(1891-1954)や壽岳文章(1900-1992)、さらにはベネデット・クロウチェ(Croce Benedetto, 1866-1952)、ヴァーノン卿(Vernon William Warren, 1834-1919)、パッセリーニ伯(Passerini conte Giuseppe Fortunato Maria, 1858-1932)、グイド・

¹¹ 大賀を上田に引き合わせたのは、おそらく竹友帛雄(藻風)であろう。竹友は明治43年3月桃山中学を卒業と同時に同志社に進むも、上田敏を慕って明治44年9月京都帝国大学文学部選科に移り、大正3年7月に卒業した。竹友の詩人としての将来を囑望した上田は、竹友の処女詩集『祈祷』(大正2年)に序文を寄せている。竹友の両親はクリスチャンであり、大賀とは教会を通じての知り合いであった(木村1958:123)。

¹² 『読売新聞』大正4年5月25日付朝刊6面。

¹³ 「伊太利亜會」の設立については、大正8年12月10日付山川宛書簡による(木村1967:92)。

ビアジ (Biagi Guido, 1855-1925)、ミケーレ・バルビ (Barbi Michele, 1867-1941) といった当代随一の世界的ダンテ学者にまで広がっている。ヴァーノンからは *Reading on the inferno of Dante*、*Reading on the purgatorio of Dante*、*Reading on the paradiso of Dante* 三部作の翻訳許可を、クロージェからは *La Poesia di Dante* の翻訳許可を取りつけ、自ら訳書の刊行を企図していたが (木村1954:79)、残念ながらヴァーノンの翻訳は計画のみに終わり、クロージェの方は黒田正利の手により翻訳されることとなった¹⁴。

大賀が海外の碩学との通信を通じて、日本におけるダンテ研究の情報発信に積極的に取り組んだことは、彼のダンテ研究の中でも特筆に値する。たとえば、英国を代表するダンテ学者の一人トインビー (Toynbee Paget, 1855-1932) は、*The Modern Language Review* 誌に寄せた「Dante Notes」で3頁に亘り日本のダンテ研究の動向を報告しているが、それは大賀からの情報提供によるものである (Toynbee1925:458-460)。それ以外にも、ダンテの邦訳書を英米の図書館に寄贈したり、*A Dante Bibliography in Japan*¹⁵ を刊行したりして、日本におけるダンテ研究の成果の普及に努めた (木村1954:82; 木村1961:93)。

このように見ていくと大賀のダンテ研究は、決して薬屋の番頭の道楽などではないことが分かるであろう¹⁶。積極的に日本人の貢献をアピールしようとしたところなど、当時の学界の水準を考えると、改めて評価し直す必要があると言っても言い過ぎではない。さらに付け加えておくべきは、大賀が、日本唯一のイタリア・ダンテ学会 (Società dantesca italiana) の会員であったことである。

¹⁴ 【ダンテの詩篇】(刀江書院、1940)。版權の関係上、当初『藝文』誌上に分載された際は、大賀と黒田の共訳となっているが (木村1961:82; 木村1967:98)、実質的には黒田の単独訳。

¹⁵ 昭和4年に私家版として刊行、翌年フィレンツェのOlschkiよりイタリア語版刊行に際し改訂を加えた。

¹⁶ 「私はダンテ研究の専門家ではない、毎日薬屋の店頭で算盤を弾いて居るもので、研究の餘裕もなければ又大切な基礎學問もない」というコメントは額面通りに受け取ることはできない (大賀1917:37)。木村 (1954:76) も参照。

最後に大賀の生涯最大の事業であったダンテ文献収集についても言及すべきだが、岩倉（1993；1998）、村橋（1974；1982）の先行文献に譲り、ここでは省略する。

5. まとめ

本稿では、大賀の生涯を三つの時期に分け、黒田の「略歴」に沿いながら、様々な文献資料により細かな肉付けを施し、より実像に近い伝記を求めて振り返ってきた。そもそも、大賀は一介の俗人であるため、偉人伝の対象となる人物のように公的記録や第三者の回想も含めて豊富な資料を期待することは不可能である。今回、資料の発掘は困難を極めたが、幸いなことに、「列伝」や「略歴」が取りこぼしている重要な論点を引き出すことができたと考えている。

そのポイントは二つあり、一つは、同志社を退校した理由、もう一つは、神戸時代の社会事業への関与の意味である。大賀の中でこの二つは間違いなく関連していたとみるのが自然である。すなわち、「レイマン」としての人生こそ、自分の追い求めるものであったということである。そうであれば、大賀にとって人生最大の問題は、「レイマン」はどうあるべきかということになるはずである。そして、おそらく大賀はその答えをダンテに見出したがゆえに、ダンテの魅力に取付かれていったのではなからうか。大賀がいくつかの論考で、ダンテの偉大さを「レイマン」であることに置いているのは、その証拠と考えられる。大賀の生涯とダンテの関わりをめぐっては、このような推論が導き出されるように筆者には思われる。

もちろんこうした仮説は、より多くの資料を掘りおこし、緻密な分析をして、丹念に検証していかなければならない。今後の課題として、一つの仮説として提示するに止めておく。

<文献>

- ・赤松啓介(1980).『神戸財界開拓者伝』. 神戸、太陽出版.
- ・石関敬三、紅野敏郎(1993).『大西祝・幾子書簡集 付大西祝宛書簡』. 東京、教文館.
- ・岩倉具忠(1993).『旭江文庫』の生みの親大賀壽吉氏のこと』『静脩』(29)、1-3.
- ・岩倉具忠(1998).『ダンテ文献のコレクター大賀壽吉』『イタリア図書』(21)、12-14.
- ・大賀壽吉(1912).『老の緑言』『基督教世界』(1504)、1912年7月11日.
- ・大賀旭江(1914).『山川丙三郎氏譯神曲第一篇地獄』『基督教世界』(1629)、1914年12月10日.
- ・大賀旭江(1917).『中世時代とダンテの一生(ダンテ研究緒論)』『新人』18(8)、37-54.
- ・岡山県教育会(1942).『岡山県教育史』中巻. 岡山、岡山県教育会.
- ・岡山市、岡山市百年史編さん委員会(1993).『岡山市百年史』資料編1. 岡山、岡山市.
- ・小川香料(1995).『小川香料百年史』. 大阪、小川香料.
- ・沖須富次郎(1889).『神戸市公民名簿』. 神戸、船井弘文堂.
- ・加藤直士(1911).『小林富次郎伝』. 東京、警醒社.
- ・北根豊編(1986).『編年複製版日本初期新聞全集』第13巻. 東京、ペリかん社.
- ・木村文雄(1954).『大賀壽吉氏の書簡 大正期ダンテ研究の一断面』『イタリア学会誌』(3)、72-85.
- ・木村文雄(1958).『大賀壽吉氏の書簡 大正期ダンテ研究の一断面 其の二』『イタリア学会誌』(7)、120-137.
- ・木村文雄(1959).『大賀壽吉氏の書簡(3)昭和二年』『イタリア学会誌』(8)、82-97.
- ・木村文雄(1961).『大賀壽吉氏の書簡(4)昭和三年から四年にかけて』『イタリア学会誌』(9)、76-95.
- ・木村文雄(1967).『大賀壽吉氏の書簡(5)大正期の書簡・補遺』『イタリア学会誌』(15)、91-109.
- ・黒田正利(1937).『故大賀壽吉氏略歴』『基督教世界』(2768)、1937年4月1日、3-4.
- ・警醒社(1921).『信仰三十年基督者列傳』. 東京、警醒社書店.

- ・神戸YMCA100年史編纂室(1980).『神戸とYMCA』.神戸、神戸キリスト教青年会.
- ・後神俊文(2005).「岡山中学源流考 謎の明治6年とその前後」『岡山朝日研究紀要』(25)、41-62.
- ・下館和巳(1991).「山川丙三郎と『神曲』」『東北学院百年史』各論編、東北学院、1991、269-314.
- ・下館和巳(2013).「『神曲』翻訳の謎 山川ダンテとのめぐりあい」『キリスト教文学研究』(30)、11-25.
- ・竹井一夫(1988).「研究山川丙三郎」『東北学院英学史年報』(9)、25-78.
- ・武田和敬翁追想録編纂委員会(1960).『武田和敬翁追想録』.大阪、武田和敬翁追想録編纂委員会.
- ・伊達俊光(1942).『大大阪と文化』.大阪、金尾文淵堂.
- ・ダンテ(1914).『神曲』.山川丙三郎訳、東京、警醒社書店.
- ・同志社社史史料編集所(1979).『同志社百年史』資料編1.京都、同志社.
- ・ハウ、A.L.(1993).『A.L.ハウ書簡集 日本の幼児教育に生涯を捧げたアニーL.ハウがアメリカの両親に宛てた手紙1887~1929年』.神戸、頌栄短期大学.
- ・濱田栄夫(2012).『門田界限の道 もうひとつの岡山文化』.岡山、吉備人出版.
- ・平山洋(1989).『大西祝とその時代』.東京、日本図書センター.
- ・松井全、児玉佳與子(2004).『Doshisha faculty records、1879-1895』.京都、同志社大学人文科学研究所同志社社史資料室.
- ・松村見二(1955).「基督教の岡山伝来」『岡山春秋』5(5)、29-34.
- ・村橋ルチア(1974).「日本のダンテ・コレクションについて」『Spazio』5(2)、7-15.
- ・村橋ルチア(1982).「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション旭江文庫」『静脩』19(1)、2-4.
- ・山口光朔、田中昭子(1984).「明治中期の神戸キリスト教界の史料的研究—1886年~1893年—」『神戸女学院大学論集』30(3)、15-43.
- ・Toynbee Paget(1925). Dante Notes. *The Modern Language Review*、(20)、458-60.